

留萌いま・むかし 第71話

るもいのアイヌの人たちの生活 1

留萌のアイヌの人たちの生活についてはよく知られていない。しかし、多くのアイヌの人たちが留萌に住んでいたことは確かである。ここに明治時代の留萌のアイヌの人たちの生活を垣間みることのできる資料がある。昭和十年に聞き取られた古老の話が昭和二十年発行の「留萌町史」の中に載せられている。当時のアイヌの人たちに対する偏見から語られた記述もあるが、女の人の目で見た貴重な資料なので紹介してみたい。

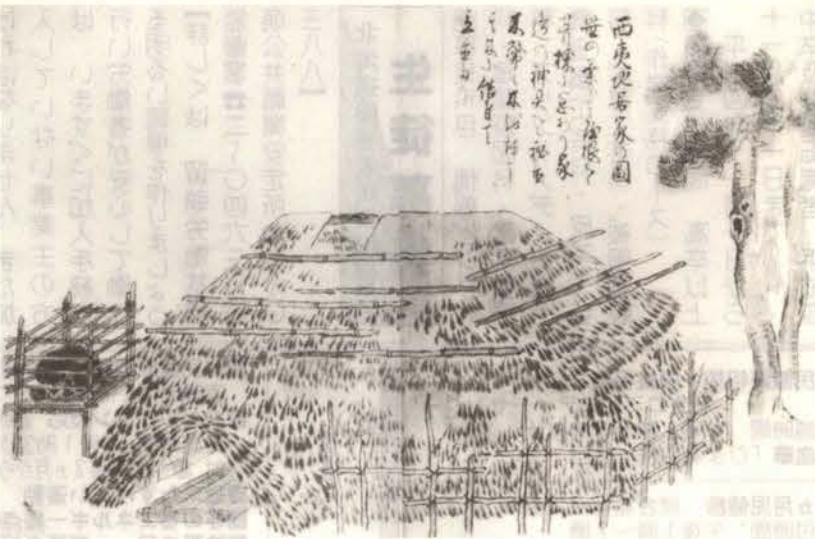
福士広志

海のふるさと館学芸係長

留萌のアイヌはピラ（現在の礼受）、コタン（元町）、ウスヤ（白谷）の三ヶ所にいたがコタンのアイヌは総て栖原（留萌場所請負人）の使用人であり、従って衣食住は全部栖原から

のである。彼らは自分の年も知らないし子の年も知らない。人に年を聞かれると運上屋に行って聞けといったものでした。一般人も糶

アイヌの熊祭（イオマンテ）は明治二十六年ごろ迄あったようで、よく濁り酒を飲んで踊り喜んでおりました。場所はウスヤのコタ



供給を受けていたのである。それでアイヌは子供が生まれると同時にお椀で一杯宛米を栖原から貰ったも

（もちこめ）なども糶など同様とても手に入りませんでした。

もちろん留萌のアイヌは栖原から仕送りの米を食ったがウンバイロ（うばゆり）、シヤク、フキ、ヒルなどを山野から採り、鮭その他の魚および米等をつ鍋に入れて雑炊様のものを作って食べました。これは和人にはなかなか食べられません。



網を直す男

大木を川の流れるように扱う男



街の男たち

顔いっぱい笑顔で米をつくる男



黄金岬で漁をする男



SLを愛しつづける男（見晴公園）

1本のロープで牛をおとなしくする男

